677

月刊
言語
2009
8
Vol.38・No.8

2009年8月1日発行（毎月1日発行）第38巻第8号通巻457号　昭和47年8月12日第3種郵便物認可

特集 手話学の現在

「空間言語」の魅力に迫る

手話のおもしろさ　神田和幸
手話言語における音韻論研究とは　原 大介
手話の文法　神田和幸
手話獲得の心理学　武居 渡
手話会話分析をはじめるために　坊農真弓
日本手話言語地図の作成に向けて　大杉 豊
手話研究への情報工学的アプローチ　長嶋祐二

◆巻頭エッセイ
千田 善／樋野興夫

◆特別記事
新時代の記述言語学〈下〉
中山俊秀

連載◉インド学へのいざない［5］

パーニニのサンスクリット文典と古典期の諸文献

後藤敏文（ごとう　としふみ）

古インドアーリヤ語の古い段階である「ヴェーダ語」文献に続き、今回は「古典サンスクリット語」の文献と伝統文法学を紹介したい。

1　パーニニとパーニニ学派の文法

インド古典学が人類史に誇るものの一つに文法学がある。インド伝統文法学は、パーニニ（Pāṇini）が著した四〇〇〇弱の規定（スートラ）から成る『アシュターデャーイー』（八つの学課から成る書）という完成した体系をもって歴史に登場する。これが事実上唯一の文法体系であり、今日に至るまで権威的位置にある。

パーニニはシャラートゥラ（カーブル川とインダス川の合流点、現在のアトック付近）の出身とされ、ゴータマ・ブッダの活動期に近い前三八〇年頃、古く正しい言語が伝えられているとブラーフマナに語られる西北インドに活動したものと推定される。歴史的状況からは、アケメネス朝ペルシャの統治に関わった学者が想定される。パーニニに先立つ学者があったことは、彼自身の言及から知られる。中でも、リグヴェーダの「続け読み」を単語に分割したシャーカリャは、最初の「文献学者」と言える。

パーニニより一〇〇年程後、カーテャーヤナ（おそらく東インド）が不備を補おうとしたが、さらにその一〇〇年

程後にパタンジャリが『大注釈書』（マハーバーシャ）を著し、基本的にパーニニの規定を過不足無い権威とする方向でパーニニ学派の文法規則と解釈運用方法とが固定され、文字に依らず伝承された。この三者を文法学の「三聖人」と呼ぶ。

パーニニが扱う言語は当時の教養人の「口語」で、およそシュラウタスートラからグリヒャスートラに懸けての言語段階の古層に当たる。ヴェーダの「雅語」をも広範囲に収録しているが、網羅的ではない。我々が普通「サンスクリット」と呼ぶ古典期のインドアーリヤ語は、遙かに時代の下るグプタ朝（後三二〇年から三〇〇年間）の復古運動に因る要素が大きいが、パーニニが規定するのは紀元前四世紀初めの生きた言語である。例えば、彼が規定する高低アクセントは古典サンスクリットにはない。それにも拘わらず、「正しく構成されたことば」（サンスクリター・バーシャー、ラーマーヤナに初出）を用いる学者階級は、自分たちの言語をパーニニ文法に則るものとしてきた。中期インドアーリヤ語段階の人々が、音韻組織や活用の主体系を中心に、古いパーニニ学派の文法を範として古インドアーリヤ語の姿を復元しようとした、というのが実情であろう。

近現代に至るまで多数の注解が著されたが、現存最古の『カーシカーヴリッティ』（七世紀）が基準的役割を担っている。仏教徒やジャイナ教徒は独自の文法の伝統を作ったが、パーニニ文法の改作に過ぎない。

パーニニ文法は動詞語基表を備えている。現在語幹形成法を十類に分け、全動詞語基を配当したもので、現在語幹を作らない語基も何れかの類に登録されている。「時制語幹」（現在、アオリスト、完了）と法（直説、現在語幹過去、願望、接続、命令）、さらに特殊な現在語幹である未来とその過去形（条件法）の全てを同一平面で扱うことと合わせ、動詞組織の構造をうまく反映していない。現在語幹の十分類は今日の文法書も踏襲している。語基表に付された語義は後代のものと考えられる。一二世紀以降、語基表に注釈類が著され、活用・派生形の検索に利用された。

サンディ（隣り合う音素間に起こる音韻の「結合」）、バフヴリーヒ（所有複合語、原義は「多くの米（をもった）」）、ヴリッディ（「増大」を原義とし、長母音＋共鳴音 āi āu ār を指したが、歴史文法では名詞派生法の一つに転用）など、パーニニの術語から出発して、言語学で広く用いられるようになった概念もある。

2 1, 1, 1.

वृद्धिरादैच् ॥ १ ॥

आ, ऐ und औ heissen Vṛddhi.

Pāṇini erklärt absichtlich वृद्धि vor गुण und setzt es als Prädicat gegen seine Gewohnheit an den Anfang des Sûtra, um sein Werk mit einem Glück verheissenden Worte zu beginnen.

अदेङ् गुणः ॥ २ ॥

अ, ए und ओ heissen Guṇa.

इको गुणवृद्धी ॥ ३ ॥

Wenn Guṇa und Vṛddhi vorgeschrieben werden, so ist implicite damit gesagt, dass sie an die Stelle von इ, उ, ऋ oder ऌ nebst deren Längen treten.

न धातुलोप आर्धधातुके ॥ ४ ॥

Wenn ein ârdhadhâtuka genanntes Suffix (s. 3, 4, 114 fgg.), vor welchem ein Verbalstamm eine Einbusse erleidet, folgt, finden Guṇa und Vṛddhi für jene Vocale nicht statt.

Beispiele लोलुव, मरीमृज, Adjective vom Intens. von लू und मृज्. Nach 2, 4, 74 fällt vor dem Suffix यङ्, d. i. य, das य vom Intensivstamm लोलूय und मरीमृज्य ab. Ohne unser Sûtra würde nach 7, 3, 84 लोलव und nach 7, 2, 114 मरीमार्ज zu bilden sein.

क्ङिति च ॥ ५ ॥

Auch nicht vor solchen Suffixen, die mit einem stummen क् oder ङ् versehen sind.

Nach 7, 3, 84 müssten die Participialendung त und die Personalendung तस् Guṇa bewirken, da aber jene क्त heisst und diese nach 1, 2, 4 ङित् ist, bildet man कृत, nicht कार्त, und चितुतः, nicht चिनोतः. In Folge unseres Sûtra heisst es auch trotz 7, 2 114 nicht मार्ज्मि, sondern मृज्मि.

दीधीवेवीटां च ॥ ६ ॥

Auch für die Endvocale der Wurzeln दीधी und वेवी, sowie für das Augment (Bindevocal) इ, treten jene Verstärkungen nicht ein.

Nach 7, 3, 84 würde man von den genannten Wurzeln das Nomen act. दीधयन् und वेवयन् bilden müssen; es lautet aber दीधान् und वेव्यन्. Der Charakter des periphr. Futurum (लुट्) ist तास् (तासि). Von भू lautet der Stamm dieses Fut. mit dem Augment इ (इट्) भवितास्; für die Endung der ersten (unserer dritten) Person wird nach 2, 4 85 आ (डा) substituirt, und vor dieser Endung fällt nach 6, 4, 143 तास् ab, so dass भवित् als Stamm übrigbleibt. Dieses müsste ohne unser Sûtra nach 7, 3, 86 mit der Personalendung आ nicht भवित्ता, sondern भवेता ergeben.

हलोऽनन्तराः संयोगः ॥ ७ ॥

Unmittelbar aufeinander folgende Consonanten heissen Saṁjoga (Doppelconsonanz).

ベートリンク版『パーニニ文法』(1887, 第3版1977) の冒頭部分。パーニニのスートラ (I 1,1–7「ヴリッディ」,「グナ」等の術語の定義) にドイツ語訳, 注釈書『カーシカーヴリッティ』からの抜粋とドイツ語による解説が付されている。

文法学に当たる語はヴャーカラナ (vyākaraṇa) で、「(個々の語形へと) 形成・展開・派生すること」を意味する。つまり、語基から具体的な語形を形成する方法と、語形を構成する諸要素が複合して表す意味とを教える、一種のプログラミングの体系である。最短距離で具体的語形に辿り着くことを要諦とし、各規則は一音節たりとも無駄を省いた短い「式」から成る。文法学者は「規則を半音節縮めることを、我が子の誕生より喜んだ」と伝えられる。また、複数の規則を一括して取り扱うことができるよう一種の記号が多用され、その運用方法、消去次第、適用順序も厳密に規則づけられている。我々がいう「文法」とは異なり、音韻、形態 (語根、接尾辞、語幹、語尾)、統語論等に次元を分けて言語を「分析」するものではない。

プログラミングの体系としては、抽象度、完成度が極めて高く、人類の頭脳労働の誇る一精華であることに疑いはない。最初の構造主義的文法、今日までに書かれた最良の文法などと称されるが、言語の「記述」を目指したものではない。また、当のプログラムを用いて作られた後のテキストが多いことから、正確さには当然と言える面がある。この高度なゲームシステムは今日なお用いられており、コンピュータ産業におけるインド出身者の活躍の基盤に、文法学の存在とその精神的背景とが指摘されることもある。

2 ヴェーダ補助学など

「サンスクリット語」による最古の文献は、ヴェーダ学派の付属文献で、多くは「スートラ」という名で編集されている。漢訳仏典に倣って「経」と訳される「スートラ」は、元来「糸」を意味し、個々の「手引き、条項」を指したが、「綱要書」を意味する包括的用語ともなった。最古の文献群は、前五〇〇年頃にまで遡る「シュラウタスートラ」で、大家長を祭主とし、部族全体や宇宙の運行等に関わる大規模祭式の執行次第を、祭官用に定め教えるものである。次に、一般家長の一生に伴う儀礼「グリヒャ（家に関わる）祭」の綱要書「グリヒャスートラ」、家長の義務、共同体の規範等を定める「ダルマスートラ（法経）」が続く。その他、測量書、葬礼の手引などが編集された。

これらは、後に「カルパスートラ」（典礼書）と総称されることがあり、さらに、発音教本（シクシャー）、語源学（ヤースカ作『ニルクタ』）、韻律学（チャンダス）、天文学（ジョーティシャ）、文法学を加えて、ヴェーダ補助学（ヴェーダーンガ）として括る伝統がある。ただし、後者のグループには、ヴェーダ学派との関連は殆ど見られない。ヴェーダ学派に属する重要文献には、さらに、各学派のマントラ（祝詞）を正確に発音する為の音韻規則を統一した「プラーティシャーキャ」（「学派毎の書」の意）とその付属文献、作者・神格・韻律の索引とその注解がある。

天文・暦の知識はヴェーダ祭式執行に必須であり、星宿への言及も多いが、古典天文学の伝統はこれを受け継ぐものではなく、ヴェーダ時代の暦法は確定されないまま今日に至っている。西方起源の文献としては、『ヤヴァナジャータカ』（ギリシャ人たちのホロスコープ、後二世紀中頃のサンスクリット訳に遡る）が現存最古である。占星術始め、各種の占術書も多く著された。

数学には、祭場設営用の測量書である、シュラウタスートラの補助文献シュルバスートラ（縄の手引き）に古い幾何学が見られるが、後五〇〇年前後の作とされるアーリヤバタの天文・数学書以降、本格的展開を見る。

3 サンスクリット語諸文献

スートラの名の下に教義内容を纏めて権威とし、学派を形成した点に、インド学芸の一特色がある。この種のスートラは、シュラウタスートラと異なり、ごく短い文からなることが多く、時には単なる目次の様相を呈する。具体的

内容はバーシャ「説かれるべきもの」、ヴァールッティカ「実際の運用に資するもの」、ヴリッティ「運用」、ティーカー「逐一解釈」などの注解・注釈文献に担われる。

哲学学派はサーンキャ（数論）学派を除き、後四・五世紀までに「スートラ」を編纂した。医学学派はチャラカ、スシュルタ、ベッラー、アシュターンガフリダヤの「サンヒター」と称する教典を纏め、第五のヴェーダの地位を主張した。ヴェーダ学派に属する「法経」（ダルマスートラ）から展開したマヌ、ヤージュニャヴァルキャ等の法典は「シャーストラ」（教本、教科書）または「スムリティ」（「記憶」または著作）と称され、ヒンドゥー社会の規範、法典として長く用いられた。シャーストラには、カウタリヤの『実利論』（アルタシャーストラ）をはじめ、兵法、馬術、象術、弓術等、王族階級を念頭におく教本がある。

インドでは箇条を数え挙げ、項目（「法数」）に括る傾向が強いが、人生の目標は、法（ダルマ）、実利（アルタ）、愛欲（カーマ）の三箇条とされた。カーマには恋愛、夫婦生活、主婦の務めなどを内容とする『カーマスートラ』（またはカーマシャーストラ）がある。音楽、建築、絵画、彫刻、農耕、飼育、調理、遊技等についてもスートラ、シャーストラが作られたが、時代は下がる。

4　古典サンスクリット文学

文学作品は紀元後に現れる。人生の描写や意味の探究よりも、文法学、韻律学、修辞学、伝統辞書、その他確立した学芸諸領域に対する理解の発揮から評釈されることが多く、この傾向は後代になるほど著しい。

美文学は仏教詩人アシュヴァゴーシャ（馬鳴、後二世紀中頃、西北インド、クシャーナ朝）に始まるとされる。代表作『ブッダチャリタ』（漢訳『仏所行讃』）は、ゴータマ・ブッダを主題に、『マハーバーラタ』風の叙事詩をサンスクリット文典を手元に置いて作る試み、という印象を与える。文法的成功については学術的吟味が必要であるが、背後にパーニニ文法があると考えてよかろう。彼に帰せられる戯曲の断片も存在する。インド最大の詩人とされるカーリダーサ（ウッジャイニーの宮廷詩人とされる、後四〜五世紀）は『シャクンタラー姫の物語、想起の場』をはじめとする宮廷戯曲や詩によって知られ、既にパーニニ文典を意識している。学術書に見られるグプタ朝のサンスクリット文化復興と軌を一にするものであろう。戯曲で

は、王とバラモン以外の台詞には中期インドアーリヤ語（プラークリット）が当てられている。短詩では、バルトリハリによる処世・恋愛・離欲の各百頌、アマルの扇情的な恋愛百頌などがよく知られている。いずれも七世紀以降の作品で、以後、サンスクリット美文学は精緻の度を増して作り続けられた。

同じく七世紀頃、複数の修辞学書（アランカーラ）が纏められ、規範とされた。コーシャ（桶、容器）とよばれる伝統辞書は詩作用に同義語を列挙したもので、アマラによる韻文の辞書（六世紀より後）に代表される。文学作品はこれらに依拠すべきものとされ、一五世紀前後から現れる著名な注釈家は、造詣の深さを発揮すべく努めた。

5　叙事詩の流れ

上記の諸文献は、パーニニが念頭に置いていた言語段階の文献、ないし、それを規範に書かれた「擬古的」著作である。これらとは別に、「叙事詩サンスクリット」で著された『マハーバーラタ（バラタ族の偉大な物語）』、『ラーマーヤナ（ラーマの辿った道）』がある。標準語としての古インドアーリヤ語（サンスクリット）の表現を目指しながらも自然な言語展開の様相を示し、動詞の態が対立的ではない場合には能動態で統一するなど、活用の簡略化が見られる。過去を表す動詞語形には、語幹の機能による使い分けはもはや殆ど見られない。

マハーバーラタは、その後のインド世界を決定づけたバラタ族間の戦役を伝える吟遊詩人の古い伝承が、紀元後数世紀間に固定されたものと思われる。全一八巻、一六音節二行（八音節四行）のシュローカ「頌」と呼ばれる韻律を中心に、九万以上の詩節から成る。種々の神話をはじめ、宗教・哲学説、法典や実利論、人生訓などの断片をも含み、ヒンドゥー世界に国民文学の役割を果たした。クリシュナ信仰の一聖典『バガヴァッドギーター』も含まれる。ラーマーヤナは「最初の詩人」ヴァールミーキ作のものに代表される。文学的色彩が強く、美術、芸能の題材として、ジャワをはじめ広く南方にも受容された。

非パーニニ的サンスクリット文献には、仏教梵語による仏典や大乗経典、ジャイナ教文献、ヒンドゥー教諸文献、特に「プラーナ」と総称される各地の伝承などがある。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）